

国 語 問 題

はじめに、これを読むこと。

(注意事項)

1. この問題用紙は十五ページまでである。ただし、ページ番号のない白紙はページ数に含まない。
2. 解答用紙の所定の欄に、必ず氏名を記入すること。
3. 解答用紙には受験番号が印刷されているので、受験番号が正しいかどうか受験票と照合して確認すること。
4. 解答はすべて「解答用紙」の解答欄に記入またはマークすること。解答欄以外のところには何も記入しないこと。
5. 解答は、必ず鉛筆またはシャープペンシル(いずれもHB・黒)で記入すること。
6. 訂正は消しゴムできれいに消し、消しくずを残さないこと。
7. 解答用紙は、絶対に汚したり折り曲げたりしないこと。
8. 文字は楷書で正確に書くこと。
9. 解答用紙は持ちかえらないこと。
10. この問題用紙は必ず持ちかえること。
11. この試験時間は六十分である。

(マークの記入例)

良い例	悪い例
●	○ ⊗ ○

(一) 次の文章を読み、後の問に答えよ。

シンプルという言葉がよく使われる。すっきりしていて深い風情か、あるいは簡潔でまとまりのいい状況を指し、大概においては良い意味に用いられることが多い。シンプルライフとか、シンプル・イズ・ベストなどははや日常化している。頭がシンプルといわれて喜ぶのは多少お人好しかも知れないが、それでも混乱したりもつれたりしている頭よりはましかもしれない。

しかし、この「シンプル」という言葉、あるいは概念はいつ生まれたのであるうか。つまり、価値観や美意識としての「シンプル」が社会の中に良好な印象として定着したのはいつのことだろうか。誤解を恐れずに言うなら、シンプルは百五十年ほど前に生まれたのだと僕は考えている。何の根拠があつてそう考えるのか、少し話してみたい。

物がまだ複雑ではなかつたころ、すなわち人類がまだ複雑なイシヨウや紋様を生み出す以前、物はシンプルであつたのだろうか。たとえば、石器時代の石器はそのほとんどが単純な形をしている。物の見方としてこれを「シンプル」と形容することもできる。しかしながら、それをつくつた石器時代の人々は、これらを決してシンプルとは捉えていなかったはずである。なぜなら、シンプルという概念は、それに相対する複雑さの存在を前提としていからである。初期の石器は確かに比較的単純な形をしているように思われるが、当人達は、簡素さやミニマルを志向してその形をつくつていたわけではない。複雑な形を作り得ない状況での単純さは、シンプルと言うよりプリミティブ、すなわち原始的、原初的と呼ぶべきである。つまりシンプルとは、複雑さや冗長さ、過剰さとの相対において認識される概念である。そう考えると、シンプルは、長い人類史のずっと後の方まで、その登場を待たなくてはならない。

人間のつくり出す物はプリミティブから複雑へと向かう。

a

こう極論できるかと思われるほどに、現存している人類の文化遺産は複雑である。たとえば青銅器。中国古代王朝の殷の遺跡、殷墟から出土した青銅器はいずれもとても複雑な形をしている。造形の順序としては簡素から複雑へとゆるやかに段階的に進化していきそうなものだが、簡素な形をした青銅器は、

殷以前の原初的な段階を除くとほとんど見あたらない。中国の青銅器は、その端緒から複雑な形をなし、精緻な紋様でその表面が覆われていた。注ぎ口や把手が大仰にできているのみならず、微細な渦巻き紋様によって表面が覆い尽くされていた。これはなぜだろうか。

青銅とは銅と錫の合金で、錫を混ぜることで沸点が下がると同時に硬くなる。他の古代文明に比すると中国は比較的青銅を手にするのが遅いが、それにしても当時のハイテク素材である。鑄型に溶かした青銅を流し込んで固める技術は、今日においてすら簡単ではない。おそらく高度な熟練を経た職人や技術者が、驚くべき集中力と時間を費やさなくては達成できない成果として、青銅器はあつたはずで、それがことさら複雑な紋様に覆われているということは、複雑さが明確な目的として探求されたことを示している。別の見方をすれば、極めつけの精緻と丹精を可能にする「強い力」がそこに表現されていると推測される。大きな青銅器は持ち上げることもできない。つまり、実用のためではなく、畏敬の対象となる力の表象として示されたわけで、これを単純に「祭器」などという言葉で片付けてはいけない。

およそ人間が集まって集団をなす場合、それが村であれ国であれ、集団の結束を維持するには強い求心力が必要になる。中枢に君臨する覇者には強い統率力がなくてはならず、この力が弱いと、より強い力を持つ者に取って代わられたり、他のより強力な集団に吸収されてしまつたりする。村も国も、回転する独楽のような存在である。回転速度や求心力がないと倒れてしまう。複雑な青銅器は、その求心力が、眼に訴える形象として顕現したものと想像される。普通の人々が目の当たりにすると、思わず「ひよええ」と怖れをなすオーラを発する複雑・絢爛なオブジェクトは、そのような暗黙の役割を担ってきた。

殷周の王朝を経て春秋戦国時代に入ると中国では複数の国々が b 割拠する状況を迎えた。少しでも油断を見せるとすぐに隣国に侵略されてしまう。したがって王は英邁、宰相は知略に長け、兵は強く統制がとれている必要があつた。この緊張感②は諸子百家の叡智を生み出す契機を生んだと言われている。青銅器の上には、文字がびつしりと鑄込まれるようになり、裝飾は武具や甲冑にも及び、見るものに畏怖を与える豪壯・絢爛・怪奇なる様相が生まれた。龍の紋様などはこの需要にこたえる最適のものである。というよりも、殷の時代に、青銅器の表面にびつしりと刻み込まれていた渦巻き紋様は、その紋様の進化の途上

で、頭や手足を持つ架空の動物に見立てられ、龍として生成したように見える。つまり龍とは、文学的^③なイツワから想起される怪物を絵師が腕をふるって描いたものではなく、宗教から派生したものでない。物の表面に偉容をなす細部を付与するための装飾紋様が動物化したと考えるべきである。ものの表面を覆い尽くすその稠密性によつて威を発することを目的に生まれてきたのであるから、有機的な形の表面にも円柱の表面にも、龍は難なく巻き付き覆い尽くしていく。(中略)

ヨーロッパにおいても、絶対君主の力が最も強かつた時代、太陽王ルイ十四世が君臨していた時代には、バロックやロココといった装飾をとめどなく横溢させる様式が絶頂を極めていた。ベルサイユ宮殿の鏡の間は、謁見の間であつたと言われているが、実際に赤い絨毯の上を歩いて、正面に座す王に謁見する情景を想像すると身のすくむ思いがする。これは僕の小さいからではない。強大な力の表象としての鏡の間が人に与える威圧とはそういうものだったはずだ。

世界が「力」によつて統治され、「力」がせめぎ合つて世界の流動性をつくつていた時代には、文化を象徴する人工物は力の表象として示された。力は人の世界に階層を生み出し、王や皇帝を頂点とする力の階層は、紋様や絢爛さの階層をも生み出し、そのような環境下では、簡素さは力の弱さとしてしか意味を持ち得なかつた。

しかしながら、決定的な変化が近代という名のもとにもたらされる。近代社会の到来によつて、価値の規準は、人が自由に生きることを基本に再編され、国は人々が生き生きと暮らすための仕組みを支えるサーピスの一環になつた。いわゆる近代市民社会の到来である。現実の歴史は、国をなす方法の多様さから様々な紆余曲折を経ることになるが、目を細めて眺める歴史は、ある方向へとはつきりと流れをつくつていく。すなわち、人間が幸福に生きる権利を基礎とする社会へと世界は舵を切つた。

その流れに即して、物は「力」の表象である必要がなくなつた。椅子は王の権力や貴族の地位を表現する必要がなくなり、単に「座る」という機能を満たせばよくなつた。科学の発達も合理主義的な考え方を助長する。合理主義とは物と機能との関係の最短距離を志向する考え方である。やがて猫足の椅子の湾曲は不要になり、バロックやロココの魅惑的な曲線や装飾は過去の遺物になつた。資源と人間の営み、形態と機能の関係は率直に計り直され、資源や労力を最大限に効率よく運用しようとする姿勢に、

新たな知性の輝きや、形の美が見出されてきた。

百五十年前というのは歴史上のエポックを指すものではない。十九世紀中葉の欧州は、産業革命を経て活気づいていた。その成果を一堂に展覧するために鉄とガラスの「水晶宮」が建造されたロンドン万博が注目を集めていた時代であり、オーストリアではトーマス・エディソンが電球の発明、アメリカではエジソンが電球の発明、英国ではダーウィンが『種の起源』を書いて世を騒がせており、日本では黒船騒動で攘夷が叫ばれていた。ここからシンプルが始まった、という d は特に見あたらぬ。しかし、シンプルという価値観が人々に新たな理性の灯りを灯しはじめたのは、大きくはこのあたりではないかと僕は考えている。

複雑さを力の表象としてきた長い時代が終わりを告げ、人間の暮らしの率直な探求から、物が、家が、そして都市や道路が再構築されはじめた。モダニズムとは、ものが複雑からシンプルに脱皮するプロセスそのものである。富や人々の欲望は往々にしてこの本質を覆い隠す。人々は時にシンプルの探求に倦んで、放蕩へと傾きがちである。しかし目を細めて骨格を見通すなら、世界はシンプルという中軸をたずさえて、この瞬間も動き続けているのである。 (原研哉の文章による)

問一 傍線部①③のカタカナの部分に漢字に改めよ。

問二 傍線部②の漢字の読みをひらがなで記せ。

問三 左の一文は、もともと本文の、ある段落の最後にあつたものである。その段落の末尾の五字(句読点も一字と数える)をそのまま抜き出して記せ。

これがシンプルである。

問四 空欄 a に入る最も適切な文を次の1〜5の中から一つ選び、その符号をマークせよ。

- 1 文化はプリミティブと複雑との混合である。
- 2 複雑な文化は永遠である。
- 3 文化は複雑から始まった。
- 4 真の文化は複雑さに宿る。
- 5 複雑な文化は実用の産物であった。

問五 傍線部A「中国の青銅器は、その端緒から複雑な形をなし、精緻な紋様でその表面が覆われていた」とあるが、その理由を筆者はどう考えているか。その理由を本文中の語句を用いて三二字〜三五字（句読点も一字と数える）で記せ。

問六 空欄 b に入る語を漢字二字で記せ。

- 問七 空欄 c に入る最も適切な語を次の1〜5の中から一つ選び、その符号をマークせよ。
- | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|
| 1 腸 | 2 臍 | 3 胃 | 4 腎 | 5 肝 |
|-----|-----|-----|-----|-----|

問八 傍線部B「目を細めて眺める歴史」の「目を細めて」と同じ用法のものを次の1〜5の中から一つ選び、その符号をマークせよ。

- 1 目を細めてプレゼントの山を見る。
- 2 砂ぼこりに目を細めて下を見る。
- 3 朝の光に目を細めて外を見る。
- 4 目を細めて物の輪郭を見る。
- 5 目を細めて孫の顔を見る。

問九 空欄

d

に入る最も適切なものを次の1〜5の中から一つ選び、その符号をマークせよ。

- 1 オーラに似た力の表象
- 2 句読点のようなエポック
- 3 近代社会到来のプロセス
- 4 プリミティブへの決別の姿
- 5 モダニズムの再来を示すもの

問十 傍線部C「シンプルの探求に倦んで、放蕩へと傾きがちである」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の1〜5の中から一つ選び、その符号をマークせよ。

- 1 簡潔さやミニマルはもういいやということになって、装飾や絢爛さをほしいままにしようとする事
- 2 合理主義的な考え方をいやいや抑しすめていくと、身をもちくずすはめになりかねないということ
- 3 すつきりと深い風情はかつこいいのだが、一層お金と欲にまかせて遊びに精を出すべきだということ
- 4 人間が幸福に生きる社会ではシンプルもいいのだが、はめをはずした複雑さも必要になるということ
- 5 人工物がプリミティブから複雑へと嫌でも向かうように、シンプルも好き勝手なものへと向かうこと

(二) 次の文章を読み、後の問に答えよ。

これは、だれもが実感することであるが、子どものときの一日は長く、大人になると、一日はもとより一月も一年も、あつという間に過ぎ去ってしまう。十代の十年と六十代の十年では年月のたつ速さがまったくちがう。

時間には a 時間と b 時間がある。おなじ一日二十四時間でも変化や感動があるかないかによって、一日は長くも短くも感じられる。つまり、時間には時計や暦の時間とは異なる「人間が感じる時間」がある。

フランスの心理学者で精神病理学者のピエール・ジャネは、「人生における時間は、その人の暦年齢に反比例して感じられる」という説を唱えている。つまり十歳の子どもの感じる一日二十四時間は、六十歳の人にとっては四時間にしか感じられないのである。

時間を長く感じるのは、変化や感動があるときである。子どものときは一日に変化があつた。学校には時間割というものがあり、国語、算数、体育という違う科目の時間があり、そして給食や放課後という時間があつた。曜日ごとに学年ごとに変化があつた。試験もあれば夏休みもあり、入学も卒業もあつた。

大人はどの日もどの月も、おなじ仕事おなじ家事に明け暮れる。変化があるとすれば病気やもめごとぐらいしかない。とりわけ現役を離れると時間割はもとよりないし、毎日が日曜日。だから一日も一年も、あつという間に過ぎてしまう。

貝原益軒は『養生訓』の中で、「老後は、わかき時より月日の早き事、十ばいなれば」と前置きしたあと、「一日を十日とし、十日を百日とし、一月を一年とし、喜樂して、あだに、口をくらすべからず」と老年の時間哲学を語っている。

一日を十日分ぐらい楽しみ、無駄に過ごしてはいけない、というのである。では、一日を十倍に拡大するにはどうしたらいいのか？

じつは、子どものときの時間は、大人がふり返ると長く思えるのであつて、子ども自身にとっては、一日はあつという間に過ぎていく。つまり、何かに夢中になつている時間はあつという間に過ぎてしまう。恋人と二人でいる時間もあつという間に過ぎていく。

てしまう。しかし、そうした時間はあとで考えると、なぜか長い。長いというより、深いと言ったほうがいいかもしれない。時間が深いというのは、直線的な時間ではなく、曲線的な時間といつてもいい。直線Aの一日二十四時間も、曲線で深く垂れ下げることができれば、百時間にも二百時間にも拡大できるのである。

読書や音楽、演劇や映画などで我を忘れた時間、未知の土地や文化にふれた新鮮な時間、あるいは深い信仰や愛の極みを体験した時間、そうしたとき、時間そのものは時間を忘れさせ、あつという間に過ぎるが、時間はふかぶかと内部に蓄えられていく。

^Bしかし、時間を内部に蓄えていくということは、なにも非日常的な特別な体験をしなければならないということではない。ごく日常的なことでもそれを深く味わいながら過こしていけば、それはそれで時間を深く生きたことになる。

たとえば、家にいてじつと何もしていないときでも、今の今という自分の人生の時間が過ぎていくその時間とひたむきに向き合っていれば、それはそれで時間を深く生きていくことになる。それはまさに黄金の時間である。

時間というものはもともと目に見えないものと考えられている。しかし、もし、黄金の時間をこの目で見つめ向き合おうというのなら、たとえば「砂時計」というものがある。

上部の砂が音もなくさらさらと下部に漏れ積もっていく。時間は過ぎ去って消えていくものと思っていたが、砂時計と向き合っていると、時間はどこか深部にゆたかに蓄えられていくのである。ドイツの作家エルンスト・ユンガーは砂時計から「ある独特の c 作用が、ある静謐せいびつな生が放射している」ことに気づき、「白い砂が音もなく漏れ落ちていく砂時計について、次のように語っている（今村孝訳「砂時計の書」）。

上部の砂が漏斗状にくぼんでゆき、下部に円錐状に堆積してゆく。失われてゆく一瞬が積もらせるこの砂の山を見てみると、時間はなるほど過ぎ去るけれどもけっして消え去るのではない、ということの証のように思われ、わたしは慰めをおぼえた。時間は、どこか深部にゆたかにたくわえられてゆくのだ。

人はよく時間は過ぎ去って消えていくと思う。しかし、砂時計では過ぎ去っていった時間は「ゆたかにたくわえられてゆく」^C。今まで見えないものとはかり思っていた時間が、「見える」のである！

今日私たちが使っている機械時計の時間は人間を縛る時間であるが、砂時計の時間は生活や生産を離れた慰めの時間である。それは子ども時代に体験したあの懐かしい時間、森や庭園にただよう治癒的な時間である。安息、瞑想、郷愁、思索、休養、眠り、祈りの時間であり、永遠をつむぐ宇宙的時間である。それはまた「私だけの時間」^Dでもある。

そして、砂時計の砂が停止することは死を暗喩する。西欧では砂時計は「死を想え」^Eのイメージとされていた。しかし、砂時計は反転すれば、生の時間がふたたび継続する。

人生のたそがれ、それは人生の輝ける収穫の季節、まさに黄金の季節である。今がその黄金の季節であるのなら、ときには何もかも忘れはて、砂時計とじーっと向き合ってみてはどうか。

自分だけの黄金の時間がさらさらと流れ、そしてあなた自身の内部にゆたかに蓄えられていくのを見るにちがいない……。

(立川昭二の文章による)

問一 空欄

a

b

に入る最も適切な語句の組み合わせを次の1〜5の中から一つ選び、その符号をマークせよ。

- | | | | | |
|---|---|-----------|---|-----------|
| 1 | a | 「相対的・社会的」 | b | 「絶対的・個人的」 |
| 2 | a | 「相対的・宇宙的」 | b | 「絶対的・人間的」 |
| 3 | a | 「絶対的・精神的」 | b | 「相対的・肉体的」 |
| 4 | a | 「絶対的・物理的」 | b | 「相対的・心理的」 |
| 5 | a | 「絶対的・創造的」 | b | 「相対的・科学的」 |

問二 傍線部 A「直線の一日二十四時間も、曲線で深く垂れ下げることができれば、百時間にも二百時間にも拡大できるのである」とあるが、この文の意味する内容として最も適切なものを次の 1〜5 の中から一つ選び、その符号をマークせよ。

- 1 貝原益軒の言うように、一日を十日、十日を百日、一月を一年として日を送れば、時間を拡大することが可能である。
- 2 子ども時代のように、一日、一週間、一年間の様々な変化をつくれば、時間は曲線となり、引き延ばすことができる。
- 3 日常的なことであれ、非日常なことであれ、自分の人生をひたむきに生きていけば、それは真に黄金の時間となる。
- 4 何かに夢中になって濃い密度で時間を過ごせば、その体験は直線的な時間よりはるかに長い時間となって記憶される。
- 5 恋人と二人でいるときの時間はあつという間に過ぎてしまうが、結婚して愛がうすまれば、時間は何倍にも長くなる。

問三 傍線部 B「く日常のことでもそれを深く味わいながら過ごしていけば」とあるが、「深く味わいながら過ごすとはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の 1〜5 の中から一つ選び、その符号をマークせよ。

- 1 常に向上心を持って行動的に暮らしていくこと。
- 2 他人とは異なる自分だけの楽しみを見出すこと。
- 3 自分の心に残るような時間を積み重ねていくこと。
- 4 静かで落ち着いた暮らしをするよう心がけること。
- 5 時間のたつのを忘れるくらい忙しい毎を送ること。

問四 空欄 c には漢字二字の熟語が入る。その熟語を次の漢字群から選んで作れ。

没 動 静 閑 沈 浮 上 下

問五 傍線部C「今まで見えないものとはかり思っていた時間が、『見える』のである」とあるが、その説明として最も適切なものを次の1〜5の中から一つ選び、その符号をマークせよ。

1 時間そのものを見ることはできないが、過ぎ去る時間の中で体験したことはいつまでもその時間の記憶と共に心の中に残るということ。

2 機械時計の時間は過ぎ去っていくのみだが、砂時計を使えば、反転させることで何度でも時間の経過を確認することができるということ。

3 時間の特質に気づいた人は、それまでよりも時間を大切に使うようになるため、時間の流れを実感することができるようになるということ。

4 日頃私達は、時間に縛られていると感じているが、何かに夢中になる時間を増やすことによつて制約から解放され、自由になるということ。

5 私達の日常生活は一見単調に見えても実際は変化があるため、子供のようにその変化に素直に感動できれば、時間が長く感じられるということ。

問六 傍線部D「私だけの時間」とあるが、それはなぜ「私だけの時間」なのか。その説明として最も適切なものを次の1〜5の中から一つ選び、その符号をマークせよ。

1 子ども時代の体験は生活や生産を離れた、個人的な出来事だから。

2 永遠をつむぐ宇宙的時間は、個人的な死後の時間を暗喩するから。

3 休養、眠り、祈りといったものは、非日常の個人的な体験だから。

4 個人的な時間は、砂時計の中で慰めの時間となつて再生するから。

5 過去の思い出は他人との共有がむずかしい、個人的なものだから。

(三)

次の文章は「狭衣物語」の一節である。狭衣は、実の兄妹のように育てられた従妹の源氏の宮を思慕している。ある明け方、帰宅した狭衣は勤行ごんぎょうしていたが、源氏の宮の様子を垣間見る。この文章を読み、後の問に答えよ。

源氏の宮の御方にも、常よりもとく起きたるけはひにて、夜もすがら降りつもりたる雪見るなるべし。その渡殿より見たまへば、若きさぶらひども五、六人、きたなげなき姿どもにて雪(注1)まろばしするをみると、宿直姿なる童べ、若き人々などの出でたる、また寝たれのかたちども、いづれとなくとりどりにをかしげにて、「踏(注2)ままく惜しきものかな」と言へば、御簾の中なる人々もこぼれ出でて、「同(注3)じうは、富士の山にこそ作らめ」と言へば、「越の白山にこそあめれ」なども言ふめり。

「御前には起きさせたまひてや」とゆかしければ、隅の間の障子のほのかなるより、やを(注3)ら見たまへば、母屋の際なる御几帳どももみな押しやられて、その柱のつらに、脇息に押しかかりて見居させたまへり。皇太后宮の御形見の色にやつれさせたまひて、このごろの枯野の色なる御衣ども、濃き薄きなるに、同じ色のうちたる、われもかうの織物重なりたるなども、人の着たらばすさまじかりぬべきを、春の花、秋の紅葉よりもなかなかなまめかしう見ゆる、人がらなめりかし。ひきもつくるはせたまはぬ寝くたれ、御髪のこぼれかかりたる肩のわたりなど、なほ(注3)なほさまことに見えさせたまふ。人々の、山作り騒ぐを御覧じて、うち笑ひうちとけさせたまへる愛敬、雪の光にもてはやされて、まことにあなめでたと見えさせたまへり。

「いでや、いはけなかりしより見(注3)たてまつり染みにしかばにや、なほ、いとかばかりなる人は世にあらじかし。かかればこそ、人をも身をもいたづらになしつるぞかし」逢はぬ嘆きにももののみ心細し。

富士の山作り出でて、煙たてたるを御覧じやりて、

^Eいつまでか消えずもあらん淡雪の煙は富士の山と見ゆとも

とのたまはずれば、御前なる人々も心々に言ふことどもなるべし。

つくづくと見たてまつるも心のみ騒ぎまさりて、いとかくしも作りきこえけんむすぶ(注4)の神もつらければ、たちのきて、

燃えわたる我が身ぞ富士の山よただ雪にも消えず煙たちつつ

など思ひ続くるに、行ひも懈怠けだうして、「我見灯明仏がけんとうみやうぶつ」とおぼすも心憂くて、「南無平等大慧法花経なんむびやうどうだいえほけきやう」としのびやかにのたまひつるも、なべてならず尊く聞こゆるに、人々見やりて、「この渡殿の障子こそ少し開きたれば、御覧じやしつらん、あさましき朝顔を」などわびあひたり。おとなしき人々は、「よろづにめでたき御ありさまかな。聞くことにも見たてまつるにもめづらしうのみありて」など、めで聞こゆ。

〔注1〕 雪まろばし——雪を転がしながら、だんだんと大きな塊にしていく遊び。

〔注2〕 踏ままく惜しき——待つ人の今も来たらばいかがせむ踏ままく惜しき庭の雪かな〔和泉式部集〕

〔注3〕 御形見の色——御形見の衣の色のいろの略。

〔注4〕 むすぶの神——天地、万物を生み出す神秘的な霊力を持った神。

〔注5〕 我見灯明仏——仏徳や仏法をたたえる詩の一節。

〔注6〕 南無平等大慧法花経——法花（華）経をたたえる言葉。

問一 傍線部①の漢字の読みをひらがな（現代仮名遣い）で記せ。

問二 傍線部A「同じうは」の意味として最も適切なものを次の1〜5の中から一つ選び、その符号をマークせよ。

- 1 かえつて
- 2 ふつうに
- 3 かわりなく
- 4 どうせなら
- 5 いつものように

問三 傍線部B「やをら」の意味として最も適切なものを次の1〜5の中から一つ選び、その符号をマークせよ。

- 1 さらに
- 2 急いで
- 3 そつと
- 4 よくよく
- 5 何となく

問四 傍線部C「なほなほさまことに見えさせたまふ」を口語訳せよ。

問五 傍線部D「見たてまつり染みにしかばにや」とあるが、誰が誰を「見たてまつり染みにしかばにや」なのか。最も適切なものを次の1〜5の中から一つ選び、その符号をマークせよ。

- 1 狭衣が皇太后宮を
- 2 狭衣が源氏の宮を
- 3 源氏の宮が狭衣を
- 4 源氏の宮が皇太后宮を
- 5 皇太后宮が源氏の宮を

問六 傍線部Eは誰が詠んだ歌か。最も適切なものを次の1〜5の中から一つ選び、その符号をマークせよ。

- 1 狭衣
- 2 源氏の宮
- 3 皇太后宮
- 4 若い女房
- 5 年配の女房

問七 傍線部F「かく」の内容として最も適切なものを次の1〜5の中から一つ選び、その符号をマークせよ。

- 1 このように源氏の宮を美しく
- 2 このように狭衣を慎重に
- 3 このように源氏の宮を物見高く
- 4 このように狭衣を信心深く
- 5 このように源氏の宮を寂しそうに

問八 本文の内容に合致しないものを次の1〜5の中から一つ選び、その符号をマークせよ。

- 1 源氏の宮のお住まいでも、女房などがいつもより早く起きた様子だ。
- 2 源氏の宮は、皇太后宮の思い出のよすがとなる地味な服装をしている。
- 3 狭衣は源氏の宮の光るような美しさを見たので、「我見灯明仏」と思うのもつらい。
- 4 年配の女房たちは狭衣のことを、声を聞いても姿を見てもすばらしいとほめている。
- 5 女房たちは、寒さにしおれた花を狭衣に見られたのではないかと当惑している。